

逍遙点描

—絵と文・中嶋嶺雄—



プラハ初秋

「1989年革命」という言葉が使えるところなら、それは、中国の天安門「血の日曜日」事件を悲劇的な代償として、東欧の社会主義体制が一斉に崩壊していった、1989年から90年にかけての歴史的な「反・革命」を意味すると言ってよいだろう。

昨年前半、中国の民主化運動や天安門事件に忙殺された直後、私は久しぶりに東欧を訪ねた。「東西ヨーロッパを比較する」と銘打った中嶋ゼミ第3回海外研修旅行であったが、プラハや東ベルリンが歴史的な大変動を体験する直前に、これらの都市へ行ったのである。

プラハに着いたその夜遅く、ホテルを抜け出して散策したモルダウ河畔やカレル橋のたたずまいは、私が世界でもっとも好きな風景の一つだが、スケッチするには形が整いすぎている。翌日は小雨模様だったので、やむを得ず宿舎のフォーラム・ホテルから、もう秋の気配の漂うプラハ市内の風景を描いてみた。

ところで、いまヨーロッパでは社会主義権力がことごとく崩壊した。脱共産化で42年ぶりに海外亡命からチェコスロバキアに戻り、ハベル新大統領夫妻臨席のもとに、スメタナ作曲の『わが祖国』を指揮してモルダウの流れをひときわ活き活きと感じさせる見事なオーケストレーションで多大な感動を与えたラファエル・クベリックの存在が示したように、東欧の場合は、共産党の一党独裁が倒れたら、西欧型近代市民社会にそのまま復帰すればよい。

さて、アジアの場合は、やがて中国や北朝鮮の社会主義体制が崩れたとして、どんな状態に戻るのだろうか。

(東京外国語大学教授)

ASIA MONTHLY

東亞

1990

11

No. 281

東欧の改革を現地に見る

— 無視しえない中国への影響 —

岡田臣弘

イラク問題をめぐる国際情勢と日本

佐藤行雄

中国の動向

政局はまた緊張と熱気を孕む

小島朋之



KAZANKAI